

ようこそ、笑顔咲く長崎県へ

Nagasaki Discovery Magazine ni-kuri

長崎県

ながさき
にこり



南島原市

四百年前、
そのまちは聖歌に
包まれていた。

No.
20

にこり

表紙のはなし 島原手延そうめん
南島原市の温暖な気候や雲仙岳の
伏流水、伝統の手延の技によって
作られたそうめんは、歯ざわり、のど経
しく美味しい。

平成25年9月発行
編集・発行 / 長崎県広報課 〒850-8570 長崎市江戸町2-13
TEL.095-895-2021 メール:ni-ko-ri@pref.nagasaki.lg.jp
デザイン / (有)イースワークス 印刷 / (株)インテックス
http://www.pref.nagasaki.jp/bunrei/kenseijoho/koho/johoshi/

長崎県

定期購読(無料)
の申込は
こちらから



この印刷物は古紙配合率100%の再生紙を使用しています。R100

ながさき

しまとく通貨で
お得な島旅!

20%のプレミアム付商品券

長崎県内の複数のしまで共通に使用できる20%のプレミアム付商品券「ながさきしまとく通貨」が販売中。長崎のしまには自然や歴史、文化、食などの魅力が盛りだくさん。「ながさきしまとく通貨」でお得にしまを巡ってみませんか!



対馬
(対馬市)

壱岐
(壱岐市)

宇久
(佐世保市宇久町)

五島
(五島市)

小値賀
(小値賀町)

長崎県

ながさき
しまとく
通貨
20%のプレミアム
1セット6,000円分の
「しまとく通貨」を
5,000円で販売!

注意事項 / ●旅行やビジネスなどで、長崎の魅力を伝える方が購入できます。●宿泊、お土産、お食事などに利用できます。●本券の使用期限は、ご購入日より6ヶ月です。●本券の購入は、1人1往復あたり6セットまでです。●本券の使用に際し、おつりは出ません。

購入窓口 / 長崎県内、福岡県のフェリーターミナル
空港などの販売店

使用できる島 / 五島(五島市、新上五島町)・壱岐・対馬
小値賀・宇久(佐世保市宇久町)

お問い合わせ / しま共通地域通貨発行委員会
〒850-0875 長崎県長崎市栄町4-9
TEL.0570-039-402

しまとく通貨 検索

http://shimatoku.com



はらだんてお／口之津歴史民俗資料館長、県文化財保護指導委員として原城跡、日野江城跡などを巡視するたびに当時の興亡の歴史に思いを馳せ、鎮魂せずにはいられない。

口之津歴史民俗資料館
南島原市口之津町甲十六七
電話／〇五・三三八・五〇八九

キリシタン弾圧

長 崎県内に南蛮船が入港するのには、平戸、横瀬浦、福田に続いて、永禄十（一五六七）年、口之津（南島原市）である。

この頃、島原半島を支配していた有馬家はキリシタン大名となり、口之津港を外港として南蛮貿易によって大きな利益を得るとともにキリスト教宣教を許した。

しかし、有馬晴信は慶長十四年（一六〇九年一月）、家臣を殺された報復として長崎港沖でポルトガル船（マー

ドレ・デ・デウス号）を襲撃・沈没させた。また、この事件解決の恩賞をめぐって、徳川家康の家臣でキリシタンであった岡本大八との間に贈収賄事件（岡本大八事件）を起こし、家康の怒りを買って、甲斐国（山梨県）に流罪となり、斬首された。この事件が直接の動機となって、慶長十七（一六四二）年、慶長十八（一六四三）年の二度にわたる家康による禁教令発令となり、キリシタン弾圧へと続いていった。有馬晴信・岡本大八と

もにキリシタンであったことから、キリシタン信者は油断ならぬ者であるという印象が当時の家康の脳裏に植え付けられた（助野健太郎「島原の乱」といわれる。

晴信の子で新領主の直純は家康の曾孫を嫁として押し付けられ、一転してキリシタン迫害の立場をとり、一六一三年十月、有馬川でデイオゴ林田ら八名が殉教した。その後、直純は日野江城から日向（延岡）城主へと移封された。

慶長十八年十二月（一六一四年一月）、家康は全国にキリスト教禁教令を発し、長崎の教会や関係施設を破壊、宣教師やキリシタンの大追放を開始した。

この年十一月、口之津で二十二名が殉教した。また宣教師や主だったキリスト教徒三百余人がマカオやミラに追放された。その中には、キリシタン大名高山右近も含まれていた。

この後、殉教・迫害が全国に及ぶようになる。元和五（一六一九年）、京都でキリシタン信者五十二名が火刑で殉教。次いで五十五名が長崎の西坂において火刑で殉教（元和の大殉教）。翌年には江戸で五十五名が殉教するなど、弾圧の嵐が吹き荒れた。

この頃（一六一六年）、大和五条（奈良県）から松倉重政が島原に入部した。まもなく島原に森岳城を築くこ

とになり、その築城に七年半を要し、領民に過酷な賦役と年貢が課せられた。重政によるキリシタン弾圧は、寛永四（一六二七）年の雲仙地獄責めでその頂点に達した。さらに、家督を継いだ勝家に至って苛斂誅求を極めた。

また、「黒田長興一世之記」によれば寛永十四（一六三七）年十月、口之津村の百姓・与三左衛門の嫁を三十俵の未進米のかたに水牢に入れ、嫁は水牢の中で子を産み落とし、母子ともに死んでしまった。それを聞いた与三左衛門は怒り心頭に達し、同心と相詰って代官を襲った。この事件は松倉勝家が天候不順や凶作続きにもかかわらず、領民から重い年貢を取立てたためである。これが「島原の乱」の発端となった。

現在、原城跡から「黄金の十字架」、日野江城跡からは金箔瓦などが出土している。いずれも有馬の黄金時代を物語る。一方、キリシタン弾圧による殉教から「島原の乱」に至る結末は余りにも悲惨というほかはないが、世界遺産候補の構成資産として最もふさわしい。

この事件を重くみた徳川幕府は寛永十六（一六三九）年、「鎖国令」を発してポルトガル船の来航を禁止、キリスト教の根絶に乗り出した。



天草四郎の墓といわれている。（原城跡）

日野江城跡から
出土した金箔瓦。
見ていると、
在りし日のきらびやかな
城の姿が浮かんでくる。

南島原市

ふるさと再発見



長

崎県の南部、島原半島の南東部に位置する南島原市。市は深江、布津、有家、西有家、北有家、南有家、口之津、加津佐の八つの町で構成されている。九州最大の湾、有明海を挟んで向かいには熊本県天草地域が見える。

八つの町に共通するもの——それは、キリスト教にまつわる歴史である。かつて、ここではキリスト教が大いに栄え、祈りの声とともに、通りには聖歌が響き渡っていた。現在、まちを歩いていてもキリスト教を連想させるものに出会うことは少ないが、それは跡形もないほどに、徹底的にキリシタン弾圧が行われた証でもある。

そんなキリスト教の繁栄と弾圧の悲劇の歴史を物語っているのが「日野江城跡」と「原城跡」。この二つの城跡は、世界遺産登録を目指している「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産としても注目を集めている。

南

四百年前、
そのまちは聖歌に
包まれていた。

原城跡の十字架

三万七千人もの人々が
血を流して戦った原城。
その城跡には今、
真っ白な十字架が
建っている。

この建物の美しく雅やかなたたずまいは一同の気に入った。大小の部屋はすべて黄金の品や典雅で華麗な絵画で飾られていた。この屋敷は最近彼の手で建てられ、見事な出来栄となった城郭の中にある。その城郭を見たポルトガル人たちは、日本にこれほど壮麗な建造物があるなどと考えてもみなかった。

これはポルトガル人宣教師ルイス・フロイスが記した日野江城の様子である。これ以上ない言葉で、絢爛豪華な様子を語っている。

文中に出てくる「彼」とは、城の主である有馬晴信のこと。晴信は日本初のキリシタン大名として知られる大村純忠の甥に当たり、彼もまた洗礼を受けたキリシタンであった。

口之津港が南蛮貿易港として開港したのは一五六二年。その翌年にアルメイダ修道士が布教活動を開始すると、キリスト教はたちまち島原半島全体へと広がった。一五七六年には、当時の領主であった晴信の父、義貞も改宗している。

日野江城跡は標高八十メートルほどの丘陵にある。二〇〇〇年に行われた発掘調査では、打ち壊した仏塔を敷石に利用した階段遺構や色彩豊かな陶磁器などが数多く出土しており、これらは晴信が仏教を排したことや、中国や東南アジアと

の貿易によって多大な富を得ていたことを示している。

発掘調査の結果、晴信と当時の権力者とのつながりも浮かび上がってきた。城内で見つかった百メートルに及ぶ階段遺構は、織田信長が築いた安土城の構造とよく似ているという。また出土品の中でもひととき目を惹くのが、金箔が張られた瓦だ。金箔瓦は鳥伏間と呼ばれるもので、これは豊臣秀吉が親族か身近な大名だけに使用を許可したもの。晴信と天下人たちの間には、どんな交流があったのだろうか。

日野江城跡の急な山道を上ってみても、そこには何もない。ただ古い石垣があるだけだ。しかし目を閉じるとイメージは駆けめぐる。スペインの商人はこう記している。

広間の戸は二十枚あり、その奥に次の美しい広間が、さらに美しい次の間が現れた。この広間からは海が見えた。

邸内には茶室が設えられ、そこからは庭園が見えたという。日野江城は有馬氏の居城であると同時に、キリスト教繁栄の本拠地であったのだろう。

本丸御殿があった場所からは、同じく晴信が建てた原城の跡が見える。栄華を極めた日野江城からわずか三キロメートルの距離にあるこの城で「あの悲劇」は起こった。

日野江城跡

色鮮やかな破片が
かつての栄華を
伝えている。

中国の陶磁器

日野江城跡から出土した「法花」といわれる中国の三彩陶磁器の壺の破片。中国の官窯として門外不出の陶磁器であったため、有馬氏の対外的な力を示す資料として注目されている。

原城 陥落

秀 吉の朝鮮出兵に従軍した晴信は、最新の築城技術を身につけて有馬へ帰ってきた。その技術を活かして造られたのが原城である。宣教師の記録には、晴信は防衛のために日野江城より堅牢な城を造ろうと原城を改築したという記述が残っている。確かに三方を海に囲まれた断崖に建つ城は天然の要塞のようだった。宣教師の言葉を裏付けるように、原城の虎口（出入口）空間は日本の城の中でも有数の広さを誇っており、これは原城が攻撃と防衛に備えた戦略的な城であることを物語っている。

約五年の歳月をかけて原城は完成した。城内には晴信や家臣の屋敷をはじめ、弾薬や食糧を蓄える三層の櫓があったという。晴信は、この新しい城が神の加護のもとにあることを願い、宣教師を呼んだ。そして城内のひとつひとつの建物が祝別されたという。

しかし晴信を待ち受けていたのは悲しい運命だった。キリシタンである幕府役人と旧領土回復を画策していたことが家康に露見し、賜死に処されてしまうのだ。これを機に禁教令が發布され、キリシタン弾圧は一気に加速の道をたどることと

なる。

晴信の死後、島原半島を治めた大名たちは領内のキリシタンたちに凄まじいまでの拷問を繰り返して、弾圧した。特に松倉重政は、身分不相応な島原城の築城に躍起となり、七年間に渡って領民たちへ多額の税と労働奉仕を突きつけた。その後もキリシタンの取り締まりにかこつけた過酷なまでの搾取と、雲仙地獄へ投げ込むなどの、およそ人の所業とは思えない拷問の数々。悪政、飢饉、凶作……。たまりかねた島原、天草の領民たちが決起したのは一六三七年――。島原半島にキリスト教が伝わって七十四年目の冬だった。これが日本の歴史上最も大規模な一揆といわれる「島原の乱」である。

わずか十五歳の天草四郎を総大将に、三万七千人の一揆軍が立て籠もったのは、二十二年前の一国一城令によって廃城と

なっていた原城だった。原城を選んだのは、その広さや戦闘に適していたという理由ばかりではなかったのかもしれない。築城の折、宣教師たちによって祝福されたこの城は、彼らにとって聖地だったのである。

一揆軍が原城に籠城していたのは八十八日間。その間、城の中には統制のとれたコミュニティが存在していた。様々な地域から従軍していた領民たちは、地域ごとに、さらに家族単位に分かれ、組織的な籠城生活を送っていたという。立て籠もった城の中で、彼らは祈り、聖歌を歌っただろう。高らかな歌声は彼ら自身を慰めたに違いない。

約十二万余の幕府軍の総攻撃を受けた翌日、原城は焼き払われ陥落。領民たちの多くは犠牲となり、幕府軍の中にも多数の死者が出た。城は幕府軍によって徹底的に破壊され、すべては埋め尽くされた。

そして
全てが
失われた。

海から見た原城跡。多くの
船が失われたこの場所も、
今は穏やかな丘陵である。

※神への奉仕をするために、人や物を区別し、聖とすること。
またその祈りや儀式のこと。

彼らが

命を懸けて 守ったもの

一九九二年、原城本丸の発掘調査が
—— 始まった。天草四郎が最期の時を
迎えたとされる、約十メートル四方の四
郎家跡が見付かったほか、特に破壊が凄
まじかった正門付近では門の瓦や石垣と
ともに、四百体にも上る数の人骨が発見
された。また、このとき複数の十字架と
メダイも出土している。鉛でできた十字
架は、信徒たちが敵が打ち込んだ弾を溶
かして作ったものであり、メダイは遺体
の口元のそばから発見されたことから、
命を落とす間際に口に含んだものではな
いかと推察されている。

原城には「ホネカミ地蔵」という小さ
なお地藏様が祀られている。これは一七
六六年に有馬村願心寺の注喜上人がこの
戦乱で亡くなった人々の骨を敵、味方の
区別なく拾い、霊を慰めた地藏尊塔であ
る。案内板によれば、「ホネカミ」とは「骨
をかみしめる」の意味で、そのことから
「自分自身のものにする」、さらに「人々
を助ける、救う」と理解されるという。
そこには宗教を超えて、ただただ命を落
とした人々への慰霊の想いがあった。

日野江城跡、原城跡の出土品
は原城文化センターで見学可。
また日野江城の階段遺構は今
後、復元が予定されている。

原城文化センター
南島原市南有馬町乙1374
TEL.0957-85-3217

鉛製十字架

原城から出土された鉛の十字架。
信徒たちが火縄銃の弾丸を
溶かして作ったものだと思われる。
人骨に混じって出土した
これらの十字架に、
島原の乱の真実の一端が見える。

青銅製のメダイ

出土したメダイには
フランス王サジェルやキリスト、
マリアの姿が刻まれている。

日 野江城跡のそばに「有馬のセミナリヨ跡」という碑がある。セミナリヨとは、キリスト教の修道者を養成するための学校である。

当時、ポルトガル貿易が盛んだった北有馬の日野江城の周りには荘厳な教会や修道院が建ち並び、外国人の宣教師や商人が行き交っていた。有馬のセミナリヨを描いたとされるイラストを見ても、とてもモダンである。日野江城下はまるでヨーロッパのようなまち並みが広がっていたのだらう。宣教師ルイス・フロイスは、まちのメイン通りを「細く長く美しい通り」とローマに報告したという。

セミナリヨでは十代前半の少年たちがキリスト教をはじめ、地理学、天文学、西洋音楽、ラテン語など、世界最先端の教育を受けていた。有馬のセミナリヨの最初の入学生は二十二名。この中に、のちに「天正遣欧少年使節」としてローマに渡る伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノの四人の少年の姿があった。

少年たちはヨーロッパの地でローマ教皇やスペイン国王に謁見し、人々の熱狂的な歓迎を受けた。しかし八年半後の一五九〇年、帰国した彼らを待ち受けていたのは、残酷にも禁教という時代だった。そんな中であって、領主の晴信は彼らを温かく迎えた。晴信は四人のために日野江城で祝宴を催したという。

The
Tensho
Boys'
Delegation
to
Europe

四人の少年たちが
過ぎした
まちを歩く。

天正遣欧少年使節

銅版画
セビリアの聖母

マニラに残されていた「セビリアの聖母」の銅版画をフランス人宣教師のプチジャン神父が日本に持ち帰った。このとき初めてこれが有馬のセミナリヨの日本人学生が制作したものだと判明した。写真は2001年に複製されたレプリカ。そのレベルの高さに関係者も目を見張ったという。

四人の大きな功績のひとつが、西洋の優れた印刷技術と多くの西洋美術の技法をもたらしたことである。彼らが持ち帰った印刷機で印刷された本はセミナリヨなどで教科書として使われ、聖画は信徒たちの手本となり、水彩、油彩、銅版画によって数々の聖人たちが描かれた。北有馬では、毎年十二月に「フェスティビタス ナタリス」が開催される。「フェスティビタス ナタリス」とは、ラテン語で「クリスマスのお祭り」の意。四百年前の北有馬の人々は「フェスティビタス ナタリス！」と言いながら、クリスマスを祝ったのだぞうだ。イベントでは四百年前のクリスマス行列が再現されるという。今もこのまちは、ローマとつながっている。



ルイス・フロイスがローマに報告した通りは、現在も風情がある。南有馬風をデザインした絵は地元の人たちの手で描かれたもの。

自然を体感する。

白木野棚田

南有馬町では美しい棚田の風景を見ることが出来る。地元の人々が「ここからの景色が最高ですよ」と教えてくれたのが「白木野棚田」だ。目の前には原城、有明海には湯島が浮かんでいる。島原の乱に先立ち、天草と島原の両軍代表者が談合を行ったことから別名「談合島」と呼ばれている島だ。湯島の先には天草半島が広がり、左手を見れば、平成新山がそびえ立つ。まさに南島原の歴史を凝縮したような景色が広がっている。

毎年七月には幻想的な風景を見ることが出来る。なんと四つの太陽が現れるのだという。一つは空に浮かび、二つは有明海に、そしてもう一つは棚田に映るのだそうだ。四つの太陽が見られるのは一年でわずかに十日ほど。しかも早朝だけである。

イルカウォッチング

早崎海峡には約三百頭の野生のイルカが生息し、九十九パーセントの確率で見ることが出来るという。

船に揺られること約四十分。イルカたちはいた！まるで遊んでほしいとせがむように船の真下から現れる親子や、ショーさながらの三回連続ジャンプを披露するイルカたち。時折見せてくれる愛らしい顔や真っ白なお腹に大興奮！こんなに近くで見られるなんて想像以上である。

イルカとともに楽しめる雄大な自然も魅力だ。天草半島のなだらかな稜線やキラキラ光る海面に映る雲、そして吹き付ける潮風。すべてが子どもに戻るひとときである。

かつさイルカウォッチング
南島原市加津佐町乙251-1
TEL.0957-87-4640

口之津観光船企業組合
南島原市口之津町丁5771-1
TEL.0957-86-4433

原城遊漁船組合(原城温泉真砂)
南島原市南有馬町丁133
TEL.0957-85-3155

有家町の

蔵め



有家町で「蔵めぐり」ができる
と聞き、足をのぼした。国道から一本入ると、のんびりとした田園風景と古い石垣や家々が連なる懐かしい風景が広がっている。車がやっと通れるような昔ながらの通りも、あちこちに祀られているお地蔵様も風情たっぷり。歩くだけで穏やかな気持ちにしてくれる、そんな有家地区をめぐる。



めぐり



撥 ね木搾り」という技法をこぞ知ろうか。一本の巨木を天井から吊し、その重みとテコの原理によつて丁寧に酒を搾る方法である。機械化が進む酒づくりの世界で、この「撥ね木搾り」を守っているのは日本でもわずか。吉田屋でも一度は途絶えたという。四代目の吉田嘉明さん

が「先代が残してくれた道具を使って新しい酒を作ろう」と思ったのはもう十年以上前のこと。すっきりとした味わいは評判を呼び、今や「はねき搾り」は店の看板商品となった。吉田さんは花酵母を使った酒づくりにも取り組み、南島原の花ひまわりの酵母を使った酒も完成させている。

吉田屋 壺之蔵

吉田屋
南島原市有家町山川785
TEL.0957-82-2032
南島原 吉田屋 検索

結婚30年。
これからも美味しい
酒を作ろう。



浦川酒造
長池さんご夫妻



浦川酒造
南島原市有家町山川1123
TEL.0957-82-2030
浦川酒造 検索

浦川酒造 式之蔵



浦川 川酒造は江戸末期の創業。築百三十年の建物と、はるばる長崎から庭師を呼び寄せて造らせたという庭が、この上なく美しい。地元米を使つて作る「時代の酒」は、その瓶も特徴的。「この瓶なら機械化できず、手作業で詰めるしかないでしょう」と笑うのはご主人の長池孜さんだ。酒も手づくりな

ら、瓶詰めまで...という考えらしい。孜さんは「酒には作り手の性格が出る」と言う。奥様の久美さんはこう話す。「お米がだんだんお酒へと成長していく姿を見るのは本当に楽しいですね。元氣のないタンクには「がんばって！」と声をかけるんですよ」。なるほど、美味しい酒ができるはずである。



五軒の蔵の中でも最も新しい「一九六三年創業の「ふるせ」。二代目の古瀬智裕さんは若い感覚を存分に発揮して新商品を生み出している。中でも二年の歳月をかけて商品化したという「生素麺」は、今までありそうでなかった商品。こちらでは手延べ素麺の体験を行っており、体験者が絶賛する生の素麺を

どうにかして食卓で食べてほしいと生まれた。この他にも健康ブームを捉えた「五穀そうめん」など、時代の流れをキャッチした商品が展開されている。「島原半島には三百五十軒以上の製麺所があり、十軒以上で個性を発揮するかが課題ですね」と古瀬さん。島原手延そうめんの新しい魅力に出会える蔵だ。

ながさき音楽祭 ～ありえ蔵めぐり音楽祭～
●10月19日(土)
酒蔵コンサート(吉田屋)
蔵めぐりミニコンサート(浦川酒造、ヤマコメ醸造)
●10月20日(日)
蔵めぐりミニコンサート(喜代屋、ふるせ)
TEL.0957-82-2032(ありえ蔵めぐり音楽祭実行委員会)

五之蔵

島原一揆村ふるせ

島原一揆村 ふるせ
南島原市有家町蒲河 341
TEL.0957-82-2394
島原一揆村ふるせ 検索

吉田の蔵の吉田さん(左)と五之蔵の古瀬さん(右)は、今回のイベントについてなんともいい雰囲気を楽しそうに語り合っていた。



有家の蔵めぐりは八年目を迎える。中心となつている老之蔵の吉田さんはこう話す。「有家町は人口九千人の小さな町ですが、製麺所が百五十軒、味噌・醤油蔵が四軒、造り酒屋が二軒あります。こんなまちはそうそうないと思い、多くの人に知ってほしいと、蔵めぐりを考えました」。蔵めぐりをする中で、なにより地元の人たちが自分たちのまちの魅力を再発見できたという。吉田さんが伝えたいのは「このまちの生産者たちのポテンシャルの高さ」。実際、蔵めぐりをしていて感じるのは、それぞれの生産

者の底知れぬチャレンジ精神と、技を磨こうとする向上心だ。若手の古瀬さんは、蔵の先輩たちの話には毎回刺激を受けると話す。生産者一人一人がライバルでありながら、まちのために何ができるかを話し合い、それをカタチにしていく姿は実に格好いい。

蔵めぐりはいつでも自由に楽しめるが、イベント開催時がおすす

めだ。十月にはながさき音楽祭の二環として「酒蔵コンサート」や「蔵めぐりミニコンサート」が行われる。酒蔵でお酒とクラシッ

クに酔いしれるのも一興だ。

参之蔵

喜代屋

喜代屋
南島原市有家町山川 1122
TEL.0957-82-2054

店内に陳列してある商品数の多さに目を見張った。伯川秀幸さんは「うちは醤油や味噌といった伝統的な調味料と、それから派生した商品を展開しています。伝統を守りながらも、時代に合ったものを作りたいと考えているんです」と話す。創業九十五年の店に並ぶ「うまいんで酢」や「焼肉もろみ」というネーミングの商品を見て、その言葉に納得した。一番人気は味噌と米味噌のいいところ取りをした「白合わせ味噌」。名物「醤油ソフトクリーム」は、キャラメルのような、みたらし団子のよう

な、不思議な味わいが楽しめる一品。ぜひ試してほしい。

「白合わせみそ」は独自の製法で豊かな香りが生まれます。



四之蔵

ヤマコメ醸造

しつとりとした趣ある日本家屋で出迎えてくれたのは三代目の八木英介さん。「あこだしみそ」や「あこだし」など、八木さんが生み出したオリジナル商品には共通点がある。それは「簡単に使える本物志向」。あこだしの入った味噌はダシをとる必要がなくお手軽だが、その味わいは実に深い。八木さんは「簡単だけではダメなんです。

美味しくない」と意味がありませんと語る。大切になっているのは、手間を惜しまないこと、本物を追求すること、そしてまずは地元の人に愛してもらうこと。三代目の心意気こそが本物である。

ヤマコメ醸造 南島原市有家町中須川 9 TEL.0957-82-2016
ヤマコメ醸造 検索

主婦の手間を省く商品を目指しています。



想像は

果てしなく

有

家の蔵めぐりをしていると、吉田さんが面白い場所があると言つて連れて行ってくれた。そこは小さな小さな港だった。

港をぐるりとまわり海の方へ行くと、真っ赤な顔をした猿の神様と恵比須様がいらっしやる。猿の神様は水難の神様だそうで、地元の人が年に一度、べんがらで色を塗り直しているそうだ。

気になるのは、隣の恵比須様。恵比須様といえば、右手に釣り竿を持ち、左脇に鯛を抱える姿が一般的だが、こちらは満面の笑みを浮かべてそろばんを持つている。商業の町には恵比須様が多く祀られているが「そろばん恵比須」は全国でも珍しいという。有家町を中心におよそ百体のものそろばん恵比須が祀られている。

そろばん恵比須にはこんな逸話がある。それは、島原の乱で生き残ったキリシタンたちによって祀られたもので、そろばんの目は十字を切っているのではないかというもの。想像をたくましくすれば、そろばんの連なった珠はロザリオをイメージさせはしないか……。

果たして如何に、真実は誰にも分らない。有馬晴信はどんな人物だったのか、豪者だといわれる日野江城はどんな建物だったのか、天草四郎は神の子だったのか……。南島原には解き明かされていない謎がまだまだある。そして、そこそがこのまちの魅力のような気がした。まちを歩いていると、積み重ねられた歴史の先端に自分もまたいるのだという思いがしみじみと湧いてくる。

四百年前、聖歌に包まれたまちは、今も人々の心の中に生き続けていた。



恵みの歳時記
鮮やかな赤色が命

早崎瀬戸 あらかぶ

関東では「かき」、
関西では「がしら」と
呼ばれるそうだが、
長崎では多くの人が
「あらかぶ」と呼ぶ。
長崎の人にとって
あらかぶは身近な魚だ。
味噌汁や唐揚げが
食卓にのぼることも
珍しくはない。
しかし早崎瀬戸の
あらかぶとなれば話は別。
長崎ブランド魚としても
知られるこちらのあらかぶは、
主に関西へ高級魚として
流通しており、
長崎人でさえめったに
口にできない
絶品の魚なのである。



長崎が誇る ブランド魚ニにあり。

荒波で育まれるから
身はプリップリッ



島 原半島南部漁協に行く

と、今朝水揚げされたばかりのあらかぶが青いケイスいっぽいに入っていた。飛び出した目に大きく開いた口。愛嬌たっぷりのユニークな姿は独特だ。あらかぶといえは、赤黒い色を思い浮かべるが、早崎瀬戸のあらかぶは鮮やかな赤色をしている。この透き通るような見事な赤色こそが、早崎瀬戸のあらかぶの証である。通常あらかぶは水深三十メートルくらいの場所で漁獲

されるが、早崎瀬戸のあらかぶは水深八十から百メートルで行われる。そのため魚が日焼けせず、全体に美しい赤色を帯びているのだ。

早崎瀬戸は島原半島と天草との海峡で、日本三大潮流ともいわれる流れの速い海域である。だからこの荒波でもまれたあらかぶの身の締まり方は抜群。その美味しさが認められ、長崎ブランド魚としても注目を集めている。

潮の流れの速い早崎瀬戸で

は、漁に出られるのは一日に三時間ほど。潮の流れが止まった時にしか漁ができないため、漁師たちは日々時間を見極めながら船を出すという。この辺りには、あらかぶ専門の漁師も多い。漁は一匹ずつ手釣りで行われる。そのため、魚へのストレスが抑えられる上に、傷もつかない。美しい魚にはそれなりの理由があったのだ。

あらかぶは年中食べられるが、旬は十二月から五月にか

けて。関西では寿司ネタや酒蒸し、アクアパッツアなどの料理に使われるというが、地元では刺身や煮付け、唐揚げや味噌汁が定番。新鮮な刺身は弾力があり、淡泊で上品な甘味がたまらない。また、味わい深いダシが楽しめる味噌汁は、伊勢海老にも引けをとらない美味しさだ。あらかぶ料理は地元の飲食店で味わうことができるほか、ホームページから注文すれば自宅でブランド魚をいただくことができる。

※イタリア料理の1つで、白身魚や魚介を水と白ワインで煮込んだもの。

島原半島南部漁業協同組合
南島原市口之津町甲803-43
TEL.0957-66-2207
島原南部漁協 検索



あき しのの みや 秋篠宮さま、 眞子さまがご視察

2013 長崎しおかぜ総文祭



写真部門の展示を鑑賞される秋篠宮さまと眞子さま(長崎歴史文化博物館)

高校生の文化の祭典、第37回全国高等学校総合文化祭(2013 長崎しおかぜ総文祭)が、7月31日から8月4日の5日間、県内各地で開催されました。

秋篠宮さまと長女眞子さまをお迎えして行われた総合開会式では、全国や海外の高校生550人が音楽、美術、ダンス、演劇などを融合させた見事な演技を披露。長崎市の出島ふ頭からスタートしたパレードでは、

約2,500人の高校生がマーチングバンドやバントワリングで街を華やかに彩りました。

県内15市町を会場に演劇、自然科学、器楽・管弦楽など計24部門で発表、展示が行われ、全国から計3,438校、2万2,131人(引率者含む)が参加。大会期間中に12万8,397人の参加者・観覧者が来場し、大成功のうちに幕を閉じました。



華やかに盛り上がった開会式(県立総合体育館)



長崎の街を彩ったパレード

こう ふく まち “ひかりと祈り 光福の街 長崎”

県の新しい観光キャッチコピーを決定しました



「ひかりと祈り 光福の街 長崎」ポスター

県の新しい観光キャッチコピーが決定しました!!
“ひかりと祈り 光福の街 長崎”

「ひかり」は世界新三大夜景に認定された長崎の夜景やランタンフェスティバル、ハウステンボスの光の王国、雲仙灯りの花ぼうろ等の光をテーマとしたイベントのほか、教会に差し込む光や美しい夕日などをイメージ。

「祈り」は世界遺産候補の教会群や平和への祈りを表しています。

そして「光福」は、訪れた人々を幸せにする長崎県の暖かさや癒し、他県では感じることができない旅情を意味します。

光と癒しあふれる長崎県へ、ぜひお越しください。



雲仙灯りの花ぼうろ



大浦天主堂の夜景



外海の夕日



長崎ランタンフェスティバル

お問い合わせ | 県の観光振興課 / TEL.095-895-2645 長崎県観光連盟 / TEL.095-826-9407

デザインの
モノがたり

2

ルリイロピッチャーSET 9,450円
 (ピッチャー4,200円、ダイノミ2,625円×2)
 有限会社 瑠璃庵 tel.095-827-0737 長崎市松が枝町5-11
 rurian 検索

緩 やかなラインが印象的な瑠璃色の涼しげなピッチャーは、手にしつくりと馴染む。水を入れ光が当たると、また違う表情を見せるのも魅力だ。

デザインしたのは、吹きガラス工房「瑠璃庵」の二代目、竹田礼人さん。作品を作るきっかけとなったのは、飲食店の容器を見たときだったと話す。「お店にある容器って、醤油さしやピッチャーなど、そのほとんどが液だれしますよね。どうにしかして液だれしない容器をガラスで作れないものかと思って」。

竹田さんは何枚ものデザイン画を描いては作り、水さの良さを試した。ガラスは千百度という高温から生まれるため、作っている最中にやり直すことはでき

ない。注ぎ口の角度を決めて、形を作る時間はなんと一秒未満。ほんの一瞬の勝負だ。竹田さんはこのスピード感と、素手でさわれないことの面白さをガラスづくりの魅力だと話す。

大切に行っていることは「いかにシンプルで、使いやすいか」。様々なものをそぎ落とし、必要なものだけを残してゆく。行われているのは足し算ではなく、常に引き算だ。それは竹田さんの人柄にも表れていて、話しているとき、ただ好きなことをひたすらに続けてきた人だけが持つ、真っ直ぐな一本の線のようなすっきりとした力強さを感じる。

作品の魅力はその色にもある。江戸時代、世界に開かれていた長崎には多くのガラス職人たちがいて、彼

らが作ったものは「長崎ガラス」と呼ばれ、長崎の名産として全国へと広まった。そして現在、発掘されている長崎ガラスの多くが美しい瑠璃色をしているという。江戸時代の人たちが愛してやまなかった色。それを再現し、現代の人へとつなぐ。瑠璃色にはそんな想いも込められていた。

以前、長崎ではいろいろな国のガラスが長崎産として売られていたという。竹田さんのお父さんはそれに耐えられず、三十年前に「瑠璃庵」をオープンした。竹田さんは父のその想いに応えるようにこう言う。「長崎に灯した明かりを消すわけにはいきません」。



一九七二年福岡県生まれ。十八歳の時に長崎市へ移住。十八歳の時、父が営む「瑠璃庵」でアルバイトを始め、すぐにその魅力に心を奪われ、ガラス職人の道へ進む。現在に至るまで長崎ガラスが生み出された場所。長崎ガラスを続けることに強い意志を感じている。長崎くんの他、川崎の網などの制作にも携わっている。十八世紀頃に長崎で作られていたといわれる長い注ぎ口が特徴の冷飲用酒器を模した「長崎チロリ」は代表作である。

竹田礼人
 有限会社 瑠璃庵

ルリイロ ピッチャーSET



長崎デザインアワード2012

入選

冷酒、水、ドレッシング…
 使い方は十人十色。
 シンプルで注ぎやすい
 長崎らしき満点のガラス作品